風景

—里見公園 二〇二〇年秋

南雲 和代

長期間

白内障で病んでいた左眼は

破損したレンズの歪みを

ロボットのレンズに変えた

左の視界と右の視界は非対称となり

風景の裂け目を落下し続け

現実から遠ざかった

里見公園の隣り

誰もが訪うことを忘れた

堅牢な廃屋

急速に郊外から東京のベッドタウンに

変貌した街の片隅の

古い小さなマンションの窓辺に

置き去りにされた老いた女

左眼には薔薇

右眼にはコロナの華

薔薇の香りを纏って

ヒトの身体に咲く毒花に怯えながら

老女は古い合戦の幻を見ていた

昼には合戦の幻影も消え

恋人達も不在の公園は

桜も薔薇も孤独に

咲くだけで散っていった

浅い眠りに終夜目覚め

窓辺に立てば

越えてはならない県境

遥かな都心

右眼はスカイツリーの灯り

左眼は富士山の薄紫の影

引き籠る日々の眼前に

朝日は国府台を昇り続ける

左眼も右眼もあまりの

まぶしさに非対称を忘れ

里見公園の木立と

スカイツリーと富士山は一体となり

私は微かに生きている呼気を繰り返す